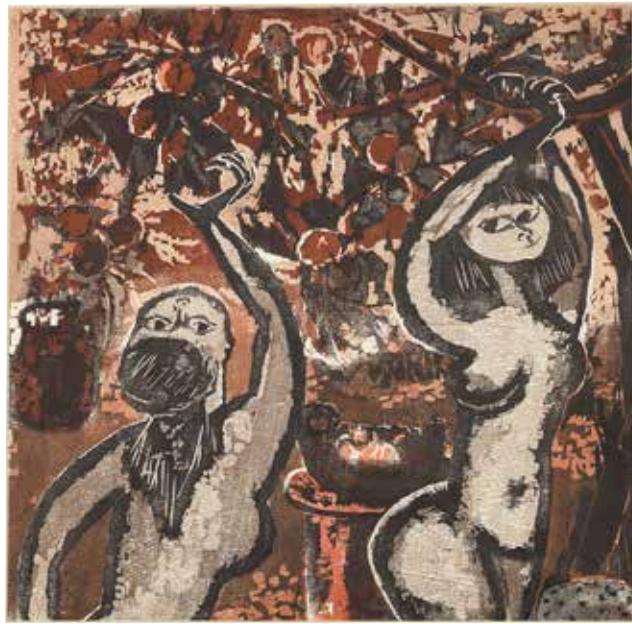


版画家 上田淑子を偲ぶ
— 無垢で甘美な少女の思い出



上田淑子《採果》1955年

版画家 上田淑子を偲ぶ —無垢で甘美な少女の思い出

会期 2017年9月26日(火)～10月1日(日)
会場 金沢21世紀美術館 市民ギャラリーB
主催 NPOひいなアクション
共催 金沢市(協働のまちづくりチャレンジ事業採択事業)
後援 北國新聞社

キュレーション 川瀬千尋(金沢湯涌夢二館)

謝 辞

本展開催にあたり、多大なるご協力をいただきました皆様に深く感謝の意を表します。また、ご協力いただきながら、ここにお名前を記すことができなかった関係者の方々に深く感謝申し上げます。

市川洋子
軽海節子
森仁史
金沢湯涌夢二館
山鬼文庫

ごあいさつ

本展は平成29年に設立いたしました「NPOひいなアクション」が実施する第一弾の事業として開催されます。第一弾の「Art at Home」は、金沢市内の個人宅にて女性アーティストの作品を展示し、近所に散歩に行くようあるじは友達の家に遊びに行くような感覚でアートを楽しんでもらおうという趣図で、市内で活動するNPOの個展を開催いたしました。第二弾となる本展は「ひいなリサーチ」プログラムとして、地域の女性アーティストや女性に関わるイメージを調査し、公開展示していくことで、地域文化資源としてのアートの存在を知つていただこうとした試みになります。

本展は、平成25年、金沢市平和町の自宅火災により82歳で急逝した木版画家、上田淑子の回顧展です。上田は、昭和28年の発足より参加する「北国版画協会」での発表を軸に活動してきました。その活動は決して華やかではありませんでしたが、家族との思い出を「私だけのメルヘン」として作品化していくその世界観に惹かれる根強いファンが多くいました。けれども、作家が亡くなつたことによつて、その作品は忘れられよつとしています。

平成15年、上田は、金沢湯涌夢一館に竹久夢二の小さな蔵書票を寄贈しています。独り身で市営住宅に暮らしていた上田は、自分の死後、「ミニ収集車が自分の家財道具一式を「ミニ」として持つていくことを危惧し



(参考図版) 竹久夢二《蔵書票「EX LIBRIS」》
1915年 (金沢湯涌夢二館蔵)



上田淑子《女(黒猫)》1984年

てしました。自身の作品よりも、竹久夢二の作品を守ろうとした上田ですが、奇跡的にも作品のほとんどは火災の被害を免れ、遠縁の親族と北国版画協会の仲間により救い出されました。本展の開催は、彼女の作品を守りたいという強い思いが繋がったからこそ実現することができました。ひいなアクションでは上田淑子の作品を評価し、継続調査を行なつていきます。

最後に、本展の開催にあたり多大なる協力を賜りました関係各位に心よりお礼申し上げます。

NPOひいなアクション 代表 高橋律子

金沢の版画家・上田淑子－創作活動とモチーフの背景

川瀬 千尋

版画家・上田淑子(1931-2013)は、父母や兄姉とともに過じし少女時代の「無垢で甘美」な思い出を版木に刻み、心中に無限に広がる「幻想的な夢」や「私だけのメルヘン」を「正しく清らかな心」で摺りあげた。寂しさを癒す追憶のなかの家族と故郷、決して戻ることのできない過去への思いから、少女・女性、鬼、人魚などを主役に、美しく愛しい物語を生み出した。上田の活動は、中央の版画界への進出を目的としたものではなく、地方の版画協会における作品発表が主体であつたため、版画家としての評価は定まっていない。この度、新たな評価に向け、遺された作品や資料を展望し、創作活動の軌跡をたどりたい。

Ⅰ 上田淑子と「北国版画協会」

昭和6年(1931)に熊本市で生まれた上田は、幼少期に父親と死別し一家で金沢へ移った。20歳の時、版画で年賀状を作つた(1)。版画講習会へ参加したことが創作の第一歩となつた(1)。

作家が原画を描き、版木を彫り、バレンで摺つて仕上げる創作版画は、昭

和初期にムーブメントとなつて地方にまで波及し、アマチュア的な作家を生んだ。戦後の金沢では、森嘉紀(当時金沢美術工芸短期大学講師)が版画講習会を開き、昭和28年に「北国版画会(後の北国版画協会)」を発足させた。特別会員は恩地孝四郎、平塚運一、棟方志功であつた(2)。上田は森に師事し、協会発足時より平成21年(2009)の閉会まで、会員として機関誌や年賀状作品集、協会主催の展覧会に作品を発表した。版木を深く彫り、納得がゆくまで摺り実験を繰り返して、紙の種類や絵の具の色、濃さ、バレンの動かし方などを詳細に記録し、妥協を許さず真摯で謙虚な姿勢で「無心になり、心を正しく清らかにして」(3)摺つた。自身のまま、昭和50年より版画制作に専念した上田は、目を悪い制作が困難になる平成22年まで活動をつづけ、回復を願いながら平成25年に自宅火災で亡くなつた。

II 初期作品

昭和20年代に、版画講習会と北国版画協会の活動を通して創作の魅力を知った上田は、年賀状にとどまらず、人物や風景、日用品などを画題として

版木に素朴な彫り跡を残し、豊かな色調で描つた。昭和30年前後には「現代美術展」へ出品するなど、北国版画協会以外の活動も確認出来る。

『無花果をもぐ女性』や『雪女』には作者の言葉が添えられている。前者には、庭の無花果を収穫した時に、西遊記に登場する美しい御殿女中が「世にも珍らしい長寿の桃を採みに来る情景」を夢想したこと、そして後者には、「雪の季節になると、女学校の時読んだLafcadio Hearn の怪談を思い出す『雪女』もその一つである」と、ハートに創作イメージの源が書きとめられていた。上田は、自身が見聞きした伝説や物語を基盤に、空想を展開させて制作するスタイルを確立していく。やがて、裸体の女性や子供たちが登場する幻想の楽園世界が創出され、明瞭な彫りによる線と面、「赤と黒と黄」(4)を基調とした色彩が、上田の制作を特徴付ける表現となつていった。

想させる桃の番人だという。そして、祭りで人魚の見世物を見た翌日、その人魚にそつくりな人間の女の子を錢湯で見かけたという幼い日のエピソードから、「あの悲しいほど美しかった湯舟の印象」が忘れられず、人魚の童話や伝説、ジゴンやマナティの記憶をもとに、「私は私のメルヘンの人魚を摺り上げてみたい」と述べ(7)、作品化した。このように、記憶に残る童話や伝説を実生活での体験や感情と組み合わせて「メルヘンの世界」の住人を生み出し、作品へと昇華させた。

IV 「無垢で甘美」な思い出の少女・懐古趣味の女性

「私の七歳の秋で跡切れてしまつて、父との日々は、かげろうの様に儂いものであつただけに、年を経る毎、より一層無垢で甘美な思い出となつて、切なく甦つて来るのであります」(8)。丸顔の少女の作品は、上田のこの回想と結び付く。犬を抱く少女像は、動物好きで犬などを飼つた父とその犬をかわいがつた上田の記憶と無縁ではないだろう。愛らしく微笑ましい温もりを感じるが、幸せな幼少期への切ない追憶がにじみ出ている。

昭和40年代以降、女性像は『明治の女』のように和装で懐古趣味的なものへと一変する。昭和42年に「版画の先生」から譲り受けたといつ竹久夢二の木版摺り蔵書票には、「独特の雰囲気に魅せられ」「若いころと変わらず、この作品は大好き」(9)といつ。うなだれる夢二の女性像に対して、上田の女性像は凜とした容貌である。

III 「幻想的な夢」「私だけのメルヘン」

裸体の女性や果樹園、鬼、人魚は、上田作品の重要なモチーフである。上田は、「誰からも制約されずに自分の心の中に無限に拡がつてゆく幻想的な夢やメルヘンの世界」を追求した。それは「既成の童話でなく、自分で作った私だけのメルヘン」だといつ(5)。例えば、「モモの畠がある。このモモは貴重な宝物であり、かわいいオニの子が番人となつて見守る…」(6)と述べ、鬼は「無花果をもぐ女性」で夢想した「世にも珍しい長寿の桃」を連

V 北陸の風景・風物詩

上田作品の兼六園や犀川などの風景画は、活氣あふれる同時代の観光地というより、郷愁を誘う懐かしい情趣に満ちている。早くに死別した父・兄の母校である第四高等学校、父親の出身地である富山県の風景や「むぎや祭」を題材とした現実の北陸の景色には、「亡き家族を偲ぶ想いが込められている。上田は、風景画が得意ではないので深入りするつもりはない（9）と述べるが、比較的点数が多い。北国版画協会から風景画というテーマが提示されて制作した可能性も考えられる。

この他、新聞社から依頼を受け、北陸の風物詩や祭をテーマに版画と切絵を連載した。家族の温もりを感じさせる上田の作品は、紙面を見事に飾っている。一方、ほぼ毎年制作した年賀状は、北陸の冬らしい姿の少女が多い。古今東西の童話や物語を干支にからめたユーモア溢れる表現もみられ、上田の「メルヘン」の幅広さに驚かされる。また、地方版の年賀葉書の依頼を受け、『加賀鳶はじて登り』を制作している。

昭和54年頃に着手し、幾度も手を入れながら最期まで完成をみなかつた『桃畠のメルヘン』には、原画と膨大なトレース、版木が残されている。樂園で大切な桃を守る鬼の子供たちは、『お兄ちゃんと私』と同じ七チーフであり、上田の「メルヘン」における最も愛しく大切な世界觀を象徴しているように思われる。本論では、上田の経歴をなぞり作品の傾向を挙げるにとどまつたが、女性版画家として、金沢ゆかりの芸術家としての評価にむけた糸口となれば幸いである。

（金沢湯涌夢一館 学芸員）

(1) 「金沢・女流作家の上田さん」「北國新聞 昭和57年2月20日付。

(2) 本谷文雄「北国版画協会の歩み」「石川県立歴史博物館紀要 第22号」石川県立歴史博物館、平成22年3月。

(3) 上田源子自筆レゾネⅡ・1のうち「明治の女」。

(4) 前掲(1)。

(5) 手紙下書き（平成5年9月12日付）。

(6) 前掲(1)。

(7) 「人魚の化身」吉川悦陽著「吉川悦陽写真集 石川の女性 1987年版」石川出版社、昭和62年。

(8) 「上田良吉」片桐慶子編「石川県人名辞典 現代編」石川出版社、平成3年。

(9) 「市民から蔵書票 初の寄贈」「北陸中日新聞 平成15年5月22日付」。

(10) 前掲(5)。

上田淑子略年表

昭和6年（1931）	4月3日 熊本市に生まれる。
昭和13年（1938）	父・良吉死去。
時期不詳	金沢へ居を移す。
昭和24年（1949）	3月 石川県立金沢第一高等女学校卒業。
昭和26年（1951）	金沢美術工芸短期大学講師・森嘉紀に版画指導を受け、以後師事する。
昭和28年（1953）	森嘉紀が発起人となり「北国版画会」（後の北国版画協会）発足、会員となる。
昭和29年（1954）	『町工場』が「第10回現代美術展」（金沢）入選。
昭和31年（1956）	「現代美術協会」準会員に推挙される。『仰天』が同協会展無鑑査出品（東京）。
昭和40年（1965）	版画研究のかたわら擦染図案創作に従事。
昭和45年（1970）	6月9日 北國新聞夕刊「暮らしの日記」に「私の梅酒」掲載。
昭和50年（1975）	版画創作に專念。
昭和54年（1979）	3月～12月 読売新聞「北陸こども歳時記」の切り絵・版画を連載。
昭和57年（1982）	5月8日～13日 第一回個展開催（金沢・画廊ブフザ樹）。
昭和59年（1984）	6月4日 北國新聞夕刊「舞台」に「私の右手」掲載。
昭和62年（1987）	1月～12月 読売新聞「北陸の味」の切絵を連載。
平成3年（1991）	吉川恍陽著『吉川恍陽写真集 石川の女性 1987年版』（石川出版社）に上田が被写体となつた写真とエッセイ「人魚の化身」掲載。
平成5年（1993）	平成4年絵入り年賀葉書（地方版／郵政省発行）の原画を版画により制作。
平成9年（1997）	1月16日 NHKワーケンド中部 “いきいき人間” 出演。
平成15年（2003）	4月10日～15日 第二回個展開催（金沢・アートシアターいしかわ）。
平成21年（2009）	金沢湯涌夢一館へ『蔵書票「EX・LIBRIS』（竹久夢二著『三味線草』扉寄贈。
平成25年（2013）	「北国版画協会」閉会。 12月19日 死去。享年82歳。

*川瀬千尋（金沢湯涌夢一館）編



上田淑子《桃島のメルヘン》原画 1979年頃



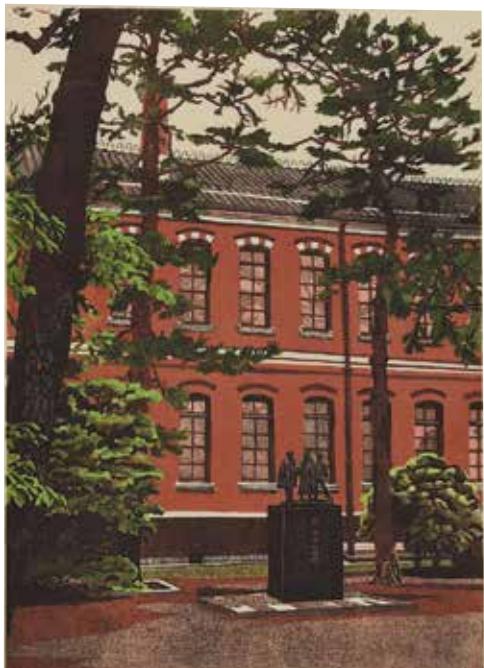
《鬼の童 I》1982年



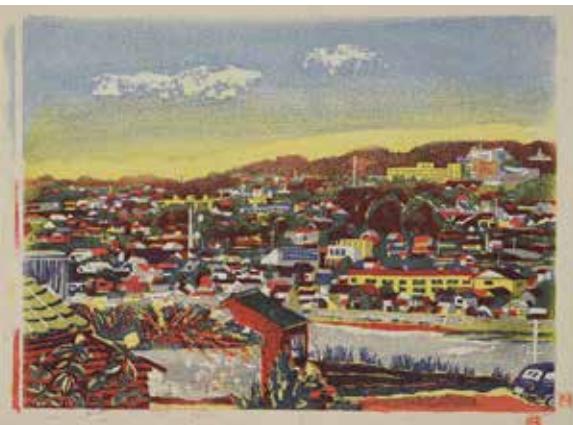
《鬼の童 II》1996年



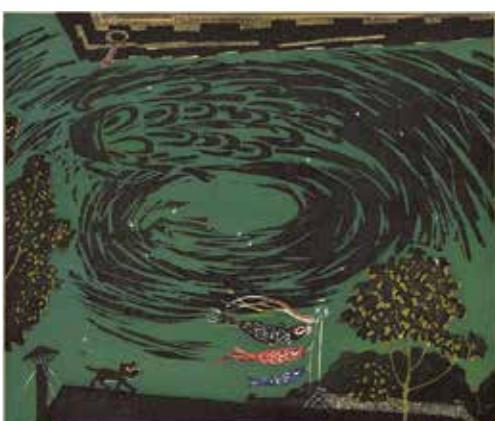
《日和(城端風景)》1976年



《父の思い出・兄の思い出(四高記念碑)》1983年



《小立野台展望(三原色のバリエーション)》1964年



《五月の童話》1975年



《むぎやまつり》1965年

上田淑子「人魚の化身」



《“金子みすゞ”は人魚になった》2004年



《人魚》1986年

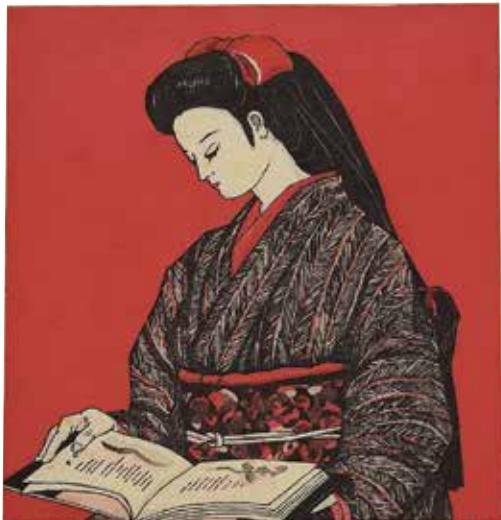
いつの祭りだったろうか。子供の頃、神明宮の境内に人魚の見世物がかかつた。

「ハイツお入りは口ぐ今、ホーラホラホラホラッ」木戸口の男衆が声を張り上げると、正面の垂れ幕がほんの一時、目の高さあたりでするすると三尺ばかり巻き上げられた。あれが噂の人魚なのかと幼い私は思わず息をのんだ。腰から下は魚になつた少女が一人、物憂げに水槽の中からこちらを見ていた。

祭りが終つた晩、私はお宮の裏の銭湯で、あの人魚によく似た見慣れぬ少女に会つた。あの子は確かに昨日、見世物小屋の前で垣間見たあの“人魚さん”だ……でも、彼女にはちゃんと足がある……。それにしても、冷え切つた体を癒すように、ひつそりと湯舟にひたつていた少女の、なんと淋しげだったことか。長い髪を引き上げ、か細いうなじを垂れて、彼女は何を考えていたのだろう。

以後、人魚の少女に会つことは一度となかつたが、あの悲しいほど美しかつた湯舟の印象を、私は今も忘れることが出来ない。やっぱりあれは人魚の化身が、そつと湯浴みに来ていたのだと私は思つてほしたのである。

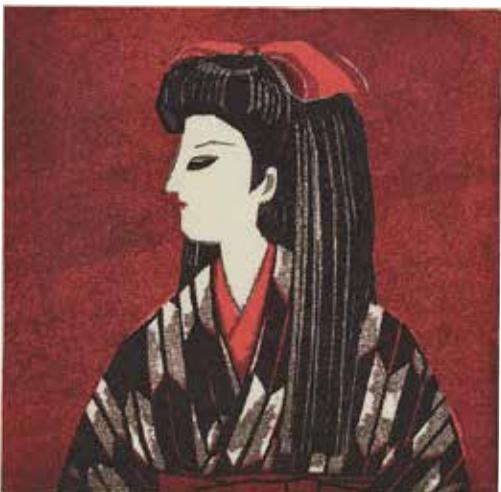
今、万感の念いをこめて、私は人魚の版画を摺つてゐる。いつか読んだ人魚の童話も伝説も、いつかどこかで見たジユゴンやマナティ達も皆々こき交せて、私は私のメルヘンの人魚を摺り上げてみたい。その愛しい人魚の顔は、遠い昔の祭りの日の、あの少女の面差しにどこか似ていてほじいと祈つてゐる。



《黒髪》1987年



《腕を組んだ少女》1955年



《明治の女》1979年



《ルリちゃん》2008年

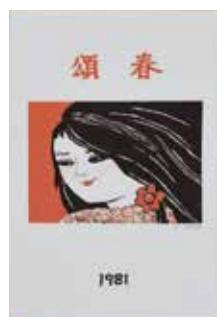
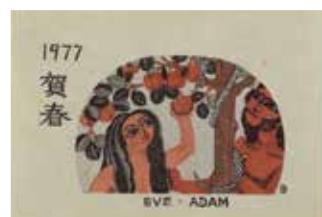


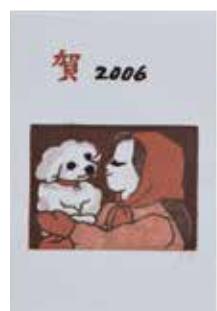
《少女（仔犬を抱く）》1999年



《日傘の少女》1967年

賀
狀







《雪女》1955年



《無花果をもぐ少女》1954年



《峠のメルヘン》1985年



讀賣新聞「北陸こども歳時記」カット 昭和54年4月3日



北國新聞（夕刊）「四月の詩」カット 昭和55年3月28日



加賀鳶はしご登り 平成4年 官製年賀状



讀賣新聞「北陸の味」カット 昭和59年11月29日



版画家 上田淑子を偲ぶ

— 無垢で甘美な少女の思い出 —

表 紙 上田淑子《お兄ちゃんと私》1998年

裏表紙 上田淑子《郷愁》1993年

執 筆 川瀬千尋(金沢湯涌夢二館)

デザイン 方野公寛(TONE)

編 集 高橋律子

撮 影 池田ひらく

発 行 2017年9月発行

発行元 NPO ひいなアクション

問合せ NPO ひいなアクション (hiinaaction@gmail.com)